

Q14

## 血液毒性は なぜおこるのですか？ どんな症状がありますか？

患者さんが受けられている抗がん剤の治療は、がん細胞をやっけることを目的に行われています。しかし、一方でがん細胞と同様に比較的早く増える能力を持つ細胞も抗がん剤の攻撃を受けます。血液細胞、粘膜細胞、爪、毛根などが当てはまります。主に血液を構成する成分である白血球（特に好中球）、赤血球、血小板が減少することを血液毒性と称します。

それでは、それぞれが減少すると何が起こるのでしょうか？

**白血球(特に好中球)の減少:**細菌や真菌(カビ類)等の攻撃に対して抵抗力がなくなり、感染症を起こしやすくなります。

**赤血球の減少:**いわゆる貧血が起こり、それに伴う症状(倦怠感、ふらつきなど)が出たり、心臓などの臓器に負担をかけることがあります。

**血小板の減少:**血を止める役目をしているので、数が減少すると出血しやすくなります。

一般的な目安としては、赤血球のヘモグロビン値が8g/dL以上、血小板数が2~3万/ $\mu$ L以上に保つように輸血で補うことを考慮し

ます(目安は状態によって変わります。たとえば心臓の機能が弱い方は高めのヘモグロビン値を目標にしますが、若く合併症の無い方なら少なくとも問題を生じないことが多いとされます)。

血液細胞は骨髄という骨の間にある空間に存在する血液細胞になる能力をもつ細胞(造血幹細胞)が成長(分化)し、白血球、赤血球、血小板などになります。その細胞も抗がん剤の攻撃をうけるので、骨髄での生産がストップすることで血液細胞が血液中に出なくなります。抗がん剤の作用がなくなれば再び生産が開始され、血液細胞が回復します。この期間を骨髄抑制期こつずいよくせいきと呼びます。とくに白血球の減少に関しては次のQ15も参照してください。(菊川佳敬)

